仏教大学史学科の教官と知恩院史料編纂所々員の人びとである。

近世の日鑑、あるいは日々の来翰・発翰控のもつ学問的な重要性は、なんといってもそれが多年にわたってとぎれることなく続いているという持続性にある。この種の史料の公刊は編纂に直接従事される研究者の努力もさることながら、数年ときには十年以上にわたってこの編纂公刊事業を背後で支える発行者の努力も大変なものである。本書は「開宗八百年記念出版」と銘うたれるごとく、知恩院の理解のもとに十年計画で行なわれはじめた事業であるが、一日も早い次巻の公刊と、さらにこの事業のねばり強い完成が期待されるところである。

（A5版　五四〇頁　昭和四九年三月十五日
京都市東山区林下町知恩院内総本山知恩院史料編纂所刊　定価四、〇〇〇円、送料二〇〇円）

（藤井学・京都府立大学教授）

茨城県史編さん中世史部会編『茨城県史料』中世編Ⅱ

茨城県は、中世文書に恵れた地域だといわれている。日本史研究者がこの地域に興味をそそられるのも、『常陸風土記』や『将門記』の舞台であることもあろうが、良質で豊富な中世文書の魅力に拠る所が大きいのではなかろうか。

今度、『中世編Ⅰ』をうけて、「茨城県史編さん中世史部会（代表宝月圭吾氏）編『茨城県史料中世編Ⅱ』が発刊され、茨城県所在の中世文書が、より多くまとまった形で見られるようになったことをまず喜びたい。

先編が県東南部所在の文書――鹿島神宮関係の文書や「税所文書」など――を対象としているのに対して、今編では、東茨城・那珂・久慈・多賀の北部四郡所在の中世文書千二十数点が収録されている。先編と同じく巻頭に六十数頁に及ぶ、郡史・寺社史・文書解題からなる行きとどいた解説が付されている。この紹介もこれに拠る所が多いが、学問的検討に耐えると共に、啓蒙性も持たねばならない県史の性格を踏えて史料集が編まれている点に敬意を表したい。

さて、収録文書の紹介に移るが、まず国衙関係の良質の文書が多いことが本編の特色である。「税所文書」は、先編所収文書の後半部分に相当し、室町・戦国時代の文書が収められている。弘安二年「作田惣勘文」の添状である「大掾詮国書状」、伊勢大神宮役夫工米関係文書などは一国平均役徴収機構に関する史料となる。常陸一宮鹿島神宮の七月祭大使役勤仕の文書は「鹿島神宮文書」と関連させれば、一宮祭礼と在地領主とのかかわりも明らかとなるであろう。常陸三宮である「吉田神社」やその別当寺「吉田薬王院」の文書は、原本焼失のため、水戸彰考館所蔵の写本を底本にして収録されている。前者は鎌倉時代の文書が多く、社領支配や社殿造営・修理をめぐって、鎌倉将軍家・国衙・領家小槻氏から発給された文書が中心を占め、領主制や東国政権論など中世史の主要問題に直接かかわる著名な文書がかなりある。また、官務小槻氏研究にも不可欠の史料といえる。後者には、天文から天正にかけて、絹衣の着用をめぐって、常陸のみならず京までも舞台にして、天台宗と真言宗の間で争われた

「絹衣相論」の文書が収められている。常陸大掾流の「石川氏文書」にみえる南北朝から戦国時代の譲状は、分割相続から嫡子単独相続への所領譲与形態の変化を解明するための貴重な史料となる。以上の文書は、いづれも鹿島神宮関係文書とともに、茨城県の代表的な中世文書であり、本編の幹をなす文書群といえる。

東国という土地柄を反映して、鎌倉幕府から古河公方・佐竹氏に至るまでの武家文書が多いが、それらが諸家に散在していることも特色である。諸家の文書を転載した「水府志料所収文書」には、原本の所在不明の文書が収録されており、鎌倉幕府・足利尊氏・鎌倉公方発給文書が含まれる外、佐竹氏発給の判物・黒印状・官途状などが多くみられる。本編に収録された佐竹氏関係の文書は、八十点近くに及ぶが、そのうちでも「甲神社文書」の弘治三年の「甲神社奉加帳」は、この時期の佐竹氏の家臣団を示す貴重な史料といえる。「生熊文書」は、四国征伐・朝鮮出兵に関する秀吉書状を含み、「芦沢文書」には、「徳川家康自筆金子請取状」や年貢皆済状が収められており、水戸領の実質的支配者は家康であったことを示し、初期水戸藩研究に必須のものとなっている。

下野東部から茨城郡にかけては、平安・鎌倉時代には天台宗が栄えた所であったが、南北朝期以後、領主の庇護を受けて他宗の進出がみられるという。その過程で創設や再興されて、地方文化の中心となった名刹の文書が収録されていることは、本史料集の内容を豊かなものにしている。真言宗では、密教の血脈相承の証文である「印信」が多数みられる「小松寺文書」や、「絹衣相論」関係文書を含む「六地蔵寺文書」が注目され、臨済宗では、豊かな什宝や典籍で知られ、足利尊氏・直義の御判御教書や夢窓疎石書状を含む「正宗寺文書」や「根本寺文書」が収められている。浄土宗に宗派としての自立を与えたといわれる了誉聖冏が経営し、その譲状や書状が残されている「常福寺文書」も忘れてはならない。「水戸彰考館所蔵文書」など、本編では写本の占める位置が高いのも特色である。常陸では、大日本史編纂の要請もあって、江戸時代から、中山信名・小宮山昌秀など著名な古文書学者によって、数々の文書の写本が作成され、現在も彰考館や静嘉堂文庫に所蔵されている。原本が失われたものもある現在、その価値は非常に高いといわねばなるまい。写本からの収録が大きな位置を占める本編は、その意味では、江戸時代からの文書編纂事業を、最新の古文書学の成果の上に立って集大成した決定版としての性格を持っているといえよう。

他に、「鹿島則幸文書」「近津文書」「志賀文書」「八槻文書」等にも触れたかったが、紙数も尽きたようなので割愛したい。最後に、他地域の県内文書と県外文書の早期の刊行を期待してこの紹介を終えたい。

（B5版　五〇〇頁　一九七四年三月刊　茨城県発行頒価三、五〇〇円）

（勝山清次・京都大学大学院学生）